



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



## クラゲのパイロット

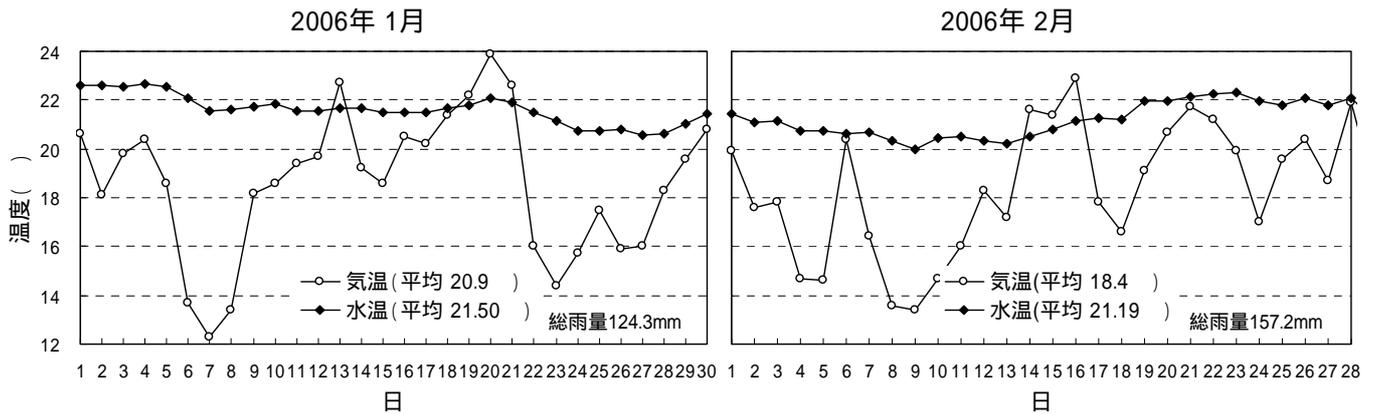
### - アジ科の一種 -

ここ数年、本州を中心にエチゼンクラゲの被害が報告されています。皆さんもテレビなどで見たことがあると思いますが、エチゼンクラゲは、傘の直径が1mにも達する大型のクラゲで、これが沿岸に大量に押し寄せ、漁の網に入ってしまったら、網が引き上げられなくなったり、捕らえた魚がクラゲによって傷つけられて商品価値をなくしてしまったりして、漁師の人たちに大変な損害を与えているのです。エチゼンクラゲは特別な例ですが、内地では数cmをこえる大型のクラゲをたくさん見かけます。ところが、これまでに慶良間で見つかった鉢クラゲ類（刺胞動物のグループの一つで、ふつう大型のクラゲをもつ仲間）は、タコクラゲなど4種だけで、カツオノエボシやヨウラククラゲなどのヒドロ虫類のクラゲ（ヒドロクラゲ）を入れても10種程度、あとは数mmほどの小さなものか、クシクラゲ類です。夏に発生し問題になるハブクラゲは、実は鉢クラゲともヒドロクラゲとも違う箱クラゲ（箱虫や立方クラゲなどの

呼び方もあります）の仲間ですが、傘の直径が10cmほどにもなる大型クラゲで、刺されると大変な被害を及ぼす、沖縄県でもっとも有名なクラゲでしょう。けれど、このクラゲにしてみても、沖縄本島と久米島にはいるのに、慶良間では見つかっていません。ですから、慶良間で大型のクラゲを見るのは、とても珍しいことなのです。

こういう事情だったので、問題のクラゲを船の上から見かけたときには、「なんとかしてでも記録をとらなければ」と決意していました。とりあえずカメラを持って海に入りました。傘の直径が約11cmで、褐色のムラサキクラゲです。褐色なのに“紫”クラゲとは変な名前ですが、この種にはとても美しい紫色をした個体もいて、おそらくその印象から名づけられたのでしょう。これまでに慶良間で見つからない種で、貴重な5種目の鉢クラゲです。しかも、このクラゲにはアジ科の一種と思われる魚と一緒に泳いでいました。そしてこの魚は、クラゲの写真を撮ろうとカメラを構えると、間に割り込んできて邪魔をするのです。右から撮ろうとすると右に、左から撮ろうとすると左にやってきて、クラゲを隠してしまいます。クマノミも同じ刺胞動物のイソギンチャクと共生する魚で、繁殖期に近づくとイソギンチャクから出てきて威嚇いかくしますが、これは自分の卵を守るためでしょう。ふつう刺胞動物とくらす動物は、その刺胞での保護を期待するため、刺胞動物に隠れてしまうものなので、このアジの仲間のようにあえて敵に体をさらしてくるのは珍しいのです。例えば、イソギンチャクにすむアカボ

## 定点観測



シカダマシやイソギンチャクエビ、以前見たミズクラゲについていたイボダイの幼魚などは、人が近づくと宿主の中や裏にもぐりこんでしまいました。どうしてこのアジの仲間は、わざわざ敵に姿を見せようとするのでしょうか。ちょっと見ていると、すぐにその理由がわかりました。この魚は、敵がやってくるとクラゲの敵側に移動し、同時に傘を口でつつくのです。するとクラゲは、きつとつかれるのがいやなのでしょう、そちら側から逃げるように反対側に曲がっていき、つまり敵から遠ざかる方向に変針するのです。右に左に何度まわりこんでも、この行動を繰り返して行っていました。こうやって、この魚は、クラゲを危険のないところに誘導しているのでしょうか。その様子は、まるでクラゲを操縦するパイロットのようでした。

このアジの仲間、それから先ほどお話したイボダイのほかにも、クラゲとくらす魚はいくつかいて、中には猛毒をもつカツオノエボシにつくものもいます。そして、胃の内容物の研究などから、それらの魚の中にはクラゲを食べるものがあることがわかっています。つまり、クラゲとくらす魚たちにとって、クラゲは身を守る家であったり、餌であったりするわけです。また、クラゲにつく寄生虫を食べる魚もいます。これまで報告されているクラゲとくらす魚の中には、たまたま泳いでいるだけだったり、クラゲを餌として利用しているだけのものもいるかもしれませんから、「共生」という言葉を簡単に使うべき

ではないと思います。しかし、今回のアジの仲間の行動が、クラゲが生き残るのを助ける働きをしているのは間違いないでしょう。それが「生きた餌を確保しておきたい」だけなのか、それともお互いを助け合う「共生」関係なのか、大変興味深い問題です。

## 阿嘉島の海より

2月18日、渡嘉敷島の国立青年の家で慶良間海域のさんご礁保全をテーマとした講演会が開催されました。参加したのは慶良間の3つのダイビング協会（あか・げるまダイビング協会、座間味ダイビング協会、渡嘉敷ダイビング協会）の会員のみなさんでした。

講演は、去年の慶良間海域のラムサール条約登録と慶良間のさんご礁の重要性を話題としたもので、地元のダイビング協会の今後の活動にとってよい刺激となったのではないのでしょうか。

そしてこの講演会の場で、慶良間の3つのダイビング協会を母体とした「慶良間海域保全連合会」の設立が提案され、実現する運びとなりました。これは3つのダイビング協会が協力して慶良間海域のさんご礁保全と上手な海域利用を目指そうとするものです。研究所としてもできる限り協力していきたいと思っています。

